

ドクターヘリ運航2年目

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 60 》

ドクターヘリの運航が2年目を迎え、県立中央病院への救急搬送件数が増加している。峡南や郡内地域からの出動要請が大幅に増え、県内で唯一3次救急医療を担う救命救急センターへ重症患者の集約化が進む。消防や他院との連携によって、県全域で質の高い救急医療を受けられる体制が整ってきている。

救命救急センター主任医長の井上潤一医師によると、同センターへの搬送件数は2011年が1119件だったのに対し、



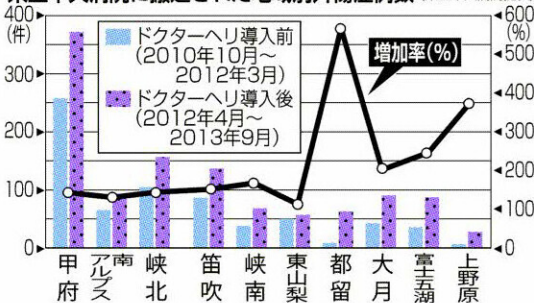
今村百合子
救命救急センター
看護師長



井上 潤一
救命救急センター
主任医長

高度な救急対応 全県で

県立中央病院に搬送された地域別外傷症例数 (県立中央病院提供)



4月にドクターヘリを導入した12年は1546件、13年は2279件と前年から倍増。このうちドクターヘリによる搬送は12年が277件、13年は455件に上った。

「ドクターヘリとドクターカーが全県をカバーできるようになったのが大きい」と井上医師。ドクターヘリは医師が乗って空から救急現場に駆けつける。夜間や悪天候でヘリが飛べない場合、医師が乗ったドクターカーが現場に急行し、救急車と合流する。

るのが最大のメリット。合併症を軽減し、救命率を上げるには、「いかに早く治療を始めるか、時間との勝負」（井上医師）という。ドクターヘリは出動要請から平均3分30秒で飛び立ち、医師が患者に接触するまでの時間は平均18分。救急車で搬送するより大幅に早く治療を開始できる。

ドクターヘリの導入で、これまで同病院への搬送が少なかった富士五湖や上野原、都留、峡南地域からの搬送が急増。井上医師は「県内のどの地域の人にも、東京など大都市と遜色ない高度な救急医療を提供できるようになってきた」と話す。増加する要請には院内各科の協力や山梨大病院と連携して対応している。

今後は治療後の患者を地域に戻す体制の整備や、筐子トネル事故のような大事故、災害時の対応が大きな課題。搭乗スタッフの技術向上も欠かせない。同センターの今村百合子看護師長は「救急の現場では豊富な知識と判断力が求められる。いかなる場合にも対応できるように技術の向上を目指したい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します